

「平山報告『文学と共同体』を承けて」

「柄谷行人著『力と交換様式』を読む」

半田 正樹

Berggruen Prize for Philosophy and Culture

Nicolas Berggruen(1961~)：投資家・慈善家 が2016年に創設。

*賞金 100万米ドル (約1億3千万円)

I. なぜ、『力と交換様式』(2022.10 岩波書店)にフォーカスするのか？

1. 昨年の安倍暗殺で明るみに出たのが、「旧統一教会問題」

→宗教の体裁をもつ組織による政治操縦 (現政権の中枢に浸透・瀰漫)

= “信教の自由” という保護器で守られている文化の一環の“逆用”

2. 『力と交換様式』は、宗教を主題とした論考との書評を目にした。

* 「力」というのが人知を超える etwas の意味

3. そもそも柄谷の「資本 - ネーション - 国家」の「三位一体」説 (あるいは「交換様式」の3タイプの組み合わせとしての社会構成体説) と私見の「社会編成の三原理説」は通底している (ように思われる)。オルタナティブ論に対する示唆・・・。

すなわち「3.11」後、わたしなりにあらためて「資本と国家の揚棄」を考究してきたつもりだが、それへの示唆を得られるのではと直感。

* 私見の「地域循環型社会」(cf. 大内「共同体社会主義」) においては宗教の位置づけは未着手。

→ちなみに、宗教は排除できない、というのが「基本」。

本書は、学術書というよりも思想の書というべき性格の書であるが、読み手に社会観を問う書、というのが適切ではないか。あるいは、マルクス派の蹉跎の歴史を知った上でオプティミズムと寄り添う者の気分を表現している問題提起の書といえばよいか。⇒このあたりが、「平山報告」を承けつつ「羅須ゼミ」で本書を手がかりとする報告を考えたモチーフ。

II. 『力と交換様式』の要点

◇ 「力」 = 人知を超える etwas

・ 「力」 = 見知らぬ者同士の「交換」においては、それを可能にする「力」が働く (= 不可欠)。 (このような「力」を霊的な力として説くのは、科学的とは言

い難い。しかし、霊のように見える力が存在するという事実を否認することも、非科学的である。) (pp.45-47)

- ・資本には交換から生じる観念的な「力」、マルクスが「物神=Fetisch」ととらえた「力」が宿り、国家にはホッブスが「リバイアサン」(旧約聖書の「ヨブ記」に出てくる)と呼んだ“怪獣”という「力」が伏在している。⇒“物神”を中心におく議論は、ルカーチに淵源する「物象化論」批判でもある。cf. (『物神』は広い意味で、宗教的なもの」 p.243)

* ちなみに、人間と人間の間には「交換 (Austausch)」があり、観念的「力」が生じるが、人間と自然の間には「交通(Verkehr)」があるだけであり、観念的「力」は生じない、とみている(pp.35-41,p.318) [←論点の1つ]

⇒観念的「力」は威力があり、きわめて強靱(esp.物神=Fetisch)

→人知を超える etwas (⇒戦争を招き寄せる etwas ?)

* 昨今のこの国における「防衛費倍増」「敵基地攻撃能力整備」「琉球弧の軍事化」etc.はオモテの動きであるが、日常ないし平時と戦争のいわばシームレス化をうながす etwas がウラないし水面下でうごめいている・・・。

◇交換様式

- ・生産様式としての経済的土台が上部構造(政治的・観念的要素)を規定しつつ、社会構成体の歴史を決定するというのがマルクス主義の標準的理解であるが、大枠としてはこれを受け入れるとしても、〈交換様式〉という経済的土台が実は決定的にとらえるべき。(cf.前著『世界史の構造』2010)。

👉マルクスを否定せず、あらためてマルクスの主張を再確認するという言説。ただし、史料をいわば最小限におさえた論理的体系としての原理論(経済原論)などとは一線を画して『資本論』の理路をたどるという構制。

〈交換様式の四タイプ〉

B 再分配(略取と再分配) (強制と安堵)	A 互酬 (贈与と返礼)
C 商品交換 (貨幣と商品)	D X

↓

◇柄谷の主張は、社会構成体(人類史の展開)を、交換様式の三つのタイプ(A,B,C)の組み合わせにおいて描出する試みであるが、最終的には「資本と国家の揚棄」の実現、すなわち交換様式D(アルカイックな社会の“高次元での回復”)をはかることにある。

◆マルクス(『経済学批判』1859)は、資本主義に先行する諸社会を**生産**

様式の観点から「アジア的」「古代的」「封建的」と区別したが、柄谷の交換様式の観点からの類別化は、それとは位相が異なる、とみるべき。

III. 『力と交換様式』の注目点／問題点

1. 人類史の基底因を〈生産様式〉ではなく (or よりも) 〈交換様式〉に求める見解。
⇒経済原則 (人間と自然との物質代謝という生産を通じた人間社会の再生産の実現) の認識の欠如→特殊歴史的な社会としての資本主義という視点の欠落？
2. 宗教改革の「効果」に「労働力商品化」があった (p.240) という認識。
* 共通言語の形成と規律ある労働の習慣
3. 資本論冒頭の商品に「株式資本」が含まれるという理解 (p.269)。
(労働力、土地も ?)
4. マルクスは、パリ・コンミュンをも否定的に総括したという見方 (p.305)。
* 個と国家の中間組織としてのコンミュン (評議会) を否定したのか？
5. 1870年普仏戦争が最初の「帝国主義戦争」であった (pp.291-292,316) とする理解。
* 資本 - ネーション - 国家 VS. 資本 - ネーション - 国家
6. 未来社会 (= 共産主義社会) は、「いわば『個人的所有』を確立することによって成立する」 (p.350) という把握。 → いわゆる**領有法則の転変**の問題
⇒「資本制的生産様式から発生する資本制的取得様式は、したがって資本制的な私的所有は、**自分の労働を基礎とする個人的な私的所有**の第一の否定である。だが、資本制的生産は、自然過程の必然性をもって、それじしんの否定を生みだす。これは**否定の否定**である。この否定は、私的所有を再建するわけではないが、しかも資本主義時代に達成されたもの—すなわち協業や、土地の・および労働そのものによって生産された生産手段の・共有—を基礎とする**個人的所有**を生みだす。」(『資本論』第1巻・第7篇・第24章・第7節) (長谷部文雄訳)。
* この『資本論』における「自己労働に基づく個人的所有」論に対して、それはいわば単純商品経済社会の問題として扱えるに過ぎず、資本家的商品経済に先立つ封建社会を特徴づけるものではない、という観点から批判したのが宇野であったが、柄谷は「自己労働に基づく」という点にはふれられないまま「氏族社会」における「個人的所有」を揚言する、という問題。
(cf. マルクスの個性性・独立性を保持した「氏族社会」論重視。p.349,389)

7. 「現在、われわれはあらためて、次のような問いに直面している。今後、資本と国家が揚棄されるような状態がありうるであろうか」(p.341)をどうとらえるか。

⇒ フーコーが「国家機関より下層の別の次元」に見出した「権力装置」とは、交換様式Cの優越化の下で変容したBなのだ。それが意味するのは、資本家階級と国家権力の結託というようなことではなく、近代国家と資本主義が分かちがたくつながっている、ということである(pp.251-252)。

➔ 資本主義と分かちがたくつながっているのが近代国家だとして、その(=近代国家の)発現(外化)の1つとして、たとえば財政があるとすれば、財政学の目的は何になるのか?いいかえれば資本主義を揚棄することにはいたらないことを前提とした上での「知」の探求、ともいえる主張をどうとらえるか?

「幸福の増税論」は、やはり徒労なシジフォスの神話・・・?

⇒ 「国家の揚棄は、交換様式Aを“高次元で回復する”ことによるのみ可能である。Aを“低次元”で回復することは、想像の共同体としてのネーションを実現することにしかない。つまり、そこでは“個人的所有”は回復されない。それに対して、Aの“高次元で”の回復とは、Dの出現にほかならない。」(p.353)

⇒ 国家や資本を揚棄することはすなわち「終末」を意味するが、「終末」とは、Aの“反覆”、いいかえれば、Aの“高次元での回復”としてDが到来する、ということの意味する(pp.395-396)。

◇Dは、・・・人が願望し、あるいは企画することによって実現されるようなものではない。それはいわば“向こうから”来るのだ(p.395)。

*ちなみに、カントは国家に付随する“怪獣”を掃討する「力」を(「神」とは呼ばずに)「自然(Natur)」と呼んだ(p.290)。

◆総じて、オルタナティブ社会へのいわゆるオーソドックスな「接近」論は、いかなる立ち位置をとることになるのか?

あるいは、例えば経済学の営為は、国家や資本の揚棄と交わる、ととらえられているが(とらえられてきたが)、あらためて考究すべき問題/論点ともいえる。

これは、柄谷のスタンスとは必ずしも関係なく、「経済学の成果(≡現状分析)は、誰がこれを繙くのか/役立てるのか」といいかえてもよい問題かもしれない。